

18. わたしは彼らの同胞のうちから、彼らのためにあなたのようなひとりの預言者を起こそう。わたしは彼の口にわたしのことばを授けよう。彼は、わたしが命じることをみな、彼らに告げる。

説教

今日からアドヴェント（待降節）です。今日が教会暦の最初となります。先主日は 18 章の後半全体を学びましたが、今日はアドヴェント（待降節）にちなんで、18 章 15 節と 18 節のメシア（救い主）預言を学びましょう。先週も少し触れましたが、もう少し丁寧に学びましょう。

イスラエル以外では霊媒や占いなどによって自分たちの問題を解決するのが一般的でしたが、イスラエルではそれが禁じられます。イスラエルは神の民なので、神に聞かなければなりません。そして、神に聞く方法は、占いや霊媒による方法ではなく、神ご自身が立てた「モーセのようなひとりの預言者」を通してなされなければなりません。こうして、神のことばは「預言者」を通して神の民に語られることとなりますが、その最初がモーセということになります。つまり、モーセが「預言者」の先駆け、最初の「預言者」となるのです。

「預言者」の職務は、神のことばを人々に教えることです。神から教えを受けて、それを人々に忠実に伝えることです。その神の教えの基本は、シナイ山でイスラエルの民に与えられた律法に啓示されています。そして、これを人々に教えるつとめを担う者が「預言者」ということとなります。通常は、幕屋で神に仕える祭司とレビ人が、いわば「預言者」となって、神のことばを人々に教えるのですが、彼らがうまくその使命を果たさない場合には、彼らとは別に、神が「預言者」を立てて、神のことばを語らせます。

初代の「預言者」はモーセで、次には後継者ヨシュアが、そして、その後の士師（さばきつかさ）たちの中にも「預言者」としての働きをした者があり、最後の士師であるサムエルの時代には「預言者」学校、すなわち神学校のようなものがありました。王国となってからも「預言者」たちの活動は続きます。代表的な預言者は、エリヤとエリシャです。王も祭司も誰も神の律法を教えない最暗黒のアハブ王の時代に、神はエリヤとエリシャを立てて、神のことばを人々に語らせた。そうすることで、神に背くイスラエルを霊的に改革し、彼らを滅びからお救いになるのです。

神のことばは、イスラエルのいのちです。彼らは、神のことばに聞き従っている時には幸せになりましたが、神のことばに背けば、神の怒りと呪いを受けました。そして、イスラエルは神のことばに逆らって滅びます。神のことばに背いて滅びることは、イスラエルのみならず全人類に共通です。最初の人間アダムとエバは、神のことばに背いてエデンの園を追放され、祝福された楽園での生活から一転し、茨と棘の生い茂る不毛の荒野での生活を強いられます。もともと死ぬことがなかったのに、死ぬようになります。僅かな糧を得るため汗水流して散々苦勞した挙げ句の果てに、最後は死んでしまいます。こうして、アダムから生まれるすべての人間は、神のことばに背いて死ぬことになりました。

後に王国になると、イスラエルは、王、祭司、預言者の三職によって統治されるようになります。このうち、祭司は、いけにえをささげて人々のために執り成し祈ると同時に、律法を人々に教えます。一方、王は、祭司の教える律法を国内に実現します。そして、祭司と王とが神の律法を教えることをしない場合には、預言者が彼らの代わりに律法を人々に教えることとなります。

つまり、このことから浮かび上がってくる一つの事実は、イスラエルの政治体制とは、要するに、神のことばを実現するための政治体制だということです。まずは祭司が律法を教えます。そして、その律法の通りに国王が国を治めます。その上で、彼らが墮落して律法を無視して律法を忠実に教えず実行しない場合には、今度は臨時に預言者が立って、神のことばを人々に教えるようになります。このような政治体制というものは、一言で要約するならば、徹頭徹尾神のことばを人々が守り行うよう働きかける体制である、と表現することができます。祭司が律法を教え、国王がそれを人々の間で実行し、それでもだめなら今度は預言者が立って律法を教えます。

つまり、イスラエルにとっては、神のことばはそれほど重要なのです。彼らにとって、神のことばはいのちです。彼らが生きるも死ぬも、それはただ神のことば次第です。それで、彼らが神のことばに聞き従って生きるよう、神は祭司を立てます。そして王を立てることを許し、さらには背信の緊急非常事態には、自ら預言者をお立てになるのです。これでもかこれでもかと言わんばかりに、神のことばに聞き従うよう働きかけます。それは、彼らをどうにか生かそうとする親心です。神のことばが人を生かします。神のことばは罪人を生かし、イスラエルを生かします。

いつの時代にも、イスラエルが大変な時には、神は神のことばを語る預言者をお立てになりました。出エジプトしてイスラエルがカナン入りする時、彼らが王国を立ち上げる時、その王国に罪が蔓延した時、そして最後は、彼らが神に逆らって神のさばきを受けて滅びる時、さらには滅びてからも、いつも預言者が立てられていました。神が彼らと共におられる、神はこれを預言者によって示されます。預言者によってイスラエルを教えます。神のことばに従って生きるよう、神はいつも働きかけるのです。

これがイスラエルの歴史です。神はいつも彼らと共におられます。神のことばはいつも彼らと共にありました。神のことばを忠実に解き明かす預言者を通して、神は生きて働いて、彼らに語りかけます。ご自身の恵みとみこころとを、預言者を通して人々に告げ知らせるのです。直接神と面会することのできない、弱く罪深い人間たちのために、神と人の間に立ち、人々に神を知らせて神の栄光を現わす、これが預言者です。

神はモーセに言われます。「わたしは彼らの同胞のうちから、彼らのためにあなたのようなひとりの預言者を起こそう。」(18) このモーセのような「ひとりの預言者」とは、直接的な意味では、モーセのように神のことばを忠実に語る預言者を意味します。しかし最終的には、この「ひとりの預言者」は、究極の預言者、預言者の完成形、第二のモーセとしてのイエスさまを指し示します。律法も預言も、イエスさまによって成就します。律法も預言も、イエスさまによって完成します。イエスさまこそは、旧約の律法と預言の成就者です。つまり、この「ひとりの預言者」とは、モーセに啓示されたメシア(救い主)預言でもあったのです。

「ひとりの預言者」を来たるべきメシヤ的大預言者と解釈する傾向は、後の時代、特に自分たちの背信によりイスラエルが滅びた後には、さらに強くなりました。これは最暗黒のアハブ王朝をただひとりで宗教改革した大預言者エリヤの再来を強く待ち望む思いと共通するものですが、人々は、自分たちを滅びから救い出してくれるモーセのような「ひとりの預言者」の劇的な出現を待望するようになります。それでイエスさまは、待望の「あの預言者」としばしば呼ばれました(ヨハネ 1:21, 6:14, 7:40)。使徒ペテロも、ステパノ執事も、申命記 18 章の「ひとりの預言者」が救い主イエスさまを意味すると解説し、イエスさまこそ第二のモーセであることを説教しました(使徒 3:22, 7:37)。そして、モーセのみならず、その後の時代のサムエルをはじめとするすべての預言者たちも、イエスさまこそ真の預言者であると証言します(使徒 3:23)。彼らが預言したように、イエスさまこそは預言者中の預言者、真の預言者です。と言うよりは、預言者たちが預言した「預言」そのもの、すなわち「神のことば」そのものでありました。

それで、イエスさまが真の預言者であることを強調した使徒ヨハネは、彼の記した「ヨハネの福音書」の冒頭に

証言します。「はじめにことばがあった。ことばは神とともにあり、ことばは神であった。」(ヨハネ 1:1)そして、こう言います。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」(14) すなわち、イエスさまは預言者たちが語った神のことばなのです。神のことばが肉をまとい、人の姿をとってこの世に現れ、私たち人間たちの間に住まわれます。それは、いわば見える神のことばです。否、見えるどころか、直接会って、触れて、直に会話できます。神は天におられ、見ることができません。でも、イエスさまは弟子たちといつも共にいて、寝食を共にされました。それで、直接、神の恵みとみこころを教えていただけます。わからないことがあれば、質問できます。何がイエスさまの喜ぶことで、何がイエスさまの忌み嫌われることであるのか、イエスさまの悲しまれること、イエスさまの願い、期待、考え、イエスさまの愛、憐れみ、慈しみ、苦しみ、その一切が一目瞭然でよく理解できるのです。

私は、今、多くの言葉を費やして神を説明しています。恵みにしてもさばきにしても、一つの事実を伝えるために、あれやこれやと多くの言葉を費やしながらか、あっちの面からこっちの面からと、懸命に神を説明します。でも、直接、神が来られたなら、そんな無駄な努力は必要ありません。直接神が来て、語り、見せて、教えるからです。共に喜び、泣き、嘆き、怒り、悲しみます。神の憐れみや愛も、イエスさまが直に憐れんで愛してくださるので、直接そのまま体験できます。百聞は一見にしかず、論より証拠です。これは最もリアルな神のことばです。これ以上にリアルなあり方は考えられません。

モーセの時代には、モーセという預言者が立てられ、その預言者を通して人々は神のことばを聞きました。シナイ山で現れたように、雷鳴と共に神が直接現れたら、人々は恐怖に打たれて、神のことばを聞くどころではないからです。それで、神は「預言者」なる人間を立ててご自身のことばを語らせませす。でも、その立てた人間が必ずしも忠実であるとは限らず、預言者が預言者としての職務を忠実に全うしないので滅びるといふことにもなっています。たとえ忠実に果たしたとしても、それを忠実に王が実行しないという場合もあり、それ故にイスラエルは滅びました。

それで、最終的には、神ご自身が直接この世に来て私たちに教えます。しかも肉をまとい、人となって、神は私たち罪人の間に住まわれます。これが生ける神のことばなるイエスさまなのです。イエスさまは、人となって、私たちの所に来られました。それは、神ご自身が来てくださったということであり、同時に、神のことばが受肉して、人となって、私たちのところに来てくださったということでもあります。イエスさまに於いて、神の律法も預言も成就しました。ただ一度モーセの時に啓示された「律法」、そして、その「律法」がそれ以降の時代でそれぞれの状況に応じて適用されて語られてきた「預言」、それが、ただ「ひとりの預言者」イエス・キリストに於いて成就しました。イエスさまこそ、預言者の中の預言者、天地万物を造り、支配し、審判し、お救いになる、生ける神のことばです。イエスさまは神のことばです。

このお方にいのちがあります。神は、生ける神のことばであるイエスさまによって、私たちにいのちを与えてくださいます。私たちの所に来てくださったイエスさまに感謝し、イエスさまによって啓示された神の恵みに応えて、生きていきましょう。